

# 柘木県現代俳句協会報

No. 175



第一七五号

発行所

〒三三七-〇三二五  
佐野市吉水駅前一―五―八水口方

柘木県現代俳句協会

発行人

中井洋子

編集人

松本登子

令和六年九月一日発行

## 私の俳句現在

： 作句への基本的アプローチ ：



須藤 火珠男

俳句について俳諧史を紐解いてみると、人と人との関わりにおいて発展してきたということが良く分かります。つまり、このことは俳句は独り机にしがみついて作品を作るということでは

なく、常に読み手が意識下に置かれている前提であるという、いわば「ふたごころ」で作品化を図ることであり、西洋の一行詩の自己表出とは違った特殊性を持つているのです。句会について句座、円座という言い方、人と人との交流が色濃く反映されている呼称でもあります。

俳句を作り始めて半世紀余、若手、中堅と言われていたのが、いつの間にか八十路半ばに近づいてきてしまいま

した。未熟なこともあって、未だに若手意識がどこかに潜んでいる感じが無い訳でもありません。

俳諧自由にかこつけて、新鮮を求めてさ迷う楽しさ、一句が読み手に映像を想起してもらえるように伝達性の高い句、切れと転換、飛躍を目論んで沈潜、沈黙、省略の効いた言葉直観で紡ぎ出すという欲張った願い。実感をベースとした展開が図られるように縦深志向を進める。すべてを直観に委ね推敲あるのみです。一句の完結が得られなかった場合は、後日へ推敲、二ラウンド三ラウンド消化となるのです。

芭蕉親し一茶は嬉し夜は長し 兜 太  
一途とは青春どんどこ蟻の列 火珠男  
チーム俳句柘木は楽し夏鶯 火珠男

支部句会作品

広報部

\* 昴 句 会

( 県南支部 )

飛花落花助走の義足鳴りひびき

和田 浩一

見えぬもの追いかけてゆく蝶二頭

中村 克子

地震の地や特に濃厚蜃気楼

石川 和子

春星はステンドグラス手をつなぐ

宇津木玲華

白鷺に棚田光陰流れだす

神山 姫余

手のひらに赤青ついの紙雛

北島 洋子

父の日の現像液の匂いかな

小杉栄美子

新築の屋根を鼓舞せるこいのぼり

須藤 正之

春神楽翁の面の若き四肢

高木 洋子

サンドイッチの三角のくずれ走り梅雨

高田 栄子

同棲の許しを請いし梅雨の夜

滝澤 良恵

海底の気泡は怒り沖縄忌

田中 房子  
戸田富美子

ミュシャ展出て巻き直す春シヨール

中村亜希子

艶めきて妻の手にのる鏡餅

まだ乾かないリフォームの燕の巢

沼田 満

バス亭の息急き切らし栗の花

橋本 尚子

蜘蛛の糸闇をからめる音かすか

根本菜穂子

花筏意志あるごとく移りゆく

七変化首を縦には振れぬ日も

わが影の不思議な動き炎天下

映像の桜で遊び満足す

十葉の白が日暮を連れて来る

原田 利江

堀 秀子

松本 幸子

遊座 純子

横井 康子

和田 璋子

石倉 夏生

早川 激

乾杯のコの字の居酒屋生ビール

母の日や母に六男一女あり

アマリリス反論前の深呼吸吸

山田和一郎

相田 勝子

水口 圭子

嫌われるたび蛇は脱皮をくり返す

北島 洋子

名をあてられ青く閃めく熱帯魚

松本 簾子

無伴奏のチェロのひびきへかすみ草

蜂に刺され棘にさされて庭いじり

夕映えの色集めたる杏の実

中田 陽子

山野井朝香

\* 亀 の 会

( 宇都宮支部 )

ひとりの農夏鶯を独占す

「洗たく屋」と大き看板夏来たる

人の世へぎいと向き変ふ春の鯉

ひとり居の多彩な百合を咲かせをり

古り急ぐ加蘇山神社さるをがせ

池澤 光子

鯉沼 桂子

齋藤 弘子

齋藤 弘子

中村 國司

増山 ちさ

森本 金一

検診日汗がやたらと出て困る

道の草結び叱られ雲の峰

\* 山麓句会

(栃木支部)

さくらんぼ叶ひさうなる夢の内

中井 洋子

人臭き曲り胡瓜のぶらさがる

中村 克子

向日葵の隣の席をうばい合う

水口 圭子

青梅雨の室の八島へ遠回り

斉藤 雅子

父の日や柱時計の螺子回す

戸田富美子

野良猫の眼のやわらぎて桜桃忌

悠

日帰りの旅の終りや夏椿

五十嵐すず

逆らわずつつましやかに余り苗

山野井朝香

饒舌も片意地も突くところてん

関口 ミツ

都知事選などはさておき梅漬ける

増山 ちさ

田水張る戸建新築さかさまに

佐々木輝美

\* きらら句会

(上都賀支部)

一途さは若き日のこと蟻の列

須藤火珠男

蚊遣火や視力の弱さ私生活

佐藤紀生子

午後三時おしろい花が動き出す

篠原 幸子

滝しぶきに僅かな浮力ラフマニノフ

とみながゆきこ

蝉時雨青天井を棲家とす

北山 暁亀

ハンディファン持つ若者や町薄暑

井ノ上節子

蚊遣火や声ややずれて念仏歌

柴田 直子

行けども行けども青田ここに生きる

白石由美子

『家康』の次の一卷蚊遣香

本間 陸美

諸家近詠

医師のことは反芻しつつ春の空

堀 秀子

亡き母の筆のドイツ語曝しけり

朝日さす親と子の部屋テレワーク

風は友しなやかに生き花芒

園児らの声もはじめて手鞠花

佐藤 道子

事始めロードミラーの車列かな

レンタルのベッドの軋みおぼろ月

啓蟄や米寿卒寿へ土不踏

街騒の残響となる梅雨の路地

三方の玻璃にせめ来るいなびかり

石川 和子

春山に躡くことも嬉しかり

草笛のいつしか父の声となり

桜蕊降りしきる日よ人恋し

産土の川のゆるるびを恵方とす

地震の地にゲリラと化して鱈起こし

須田 初江

黄泉にゐる人との対話花山茱萸

冴返る三人称の死の遠き

けもの道焙り出したる野焼きかな

虹立つを誰に伝えることもせず

河川敷の足裏の記憶揚花火

鯉沼 桂子

棟上げの柱を掠め初つばめ

岩攀ちて昼の深みへ蔓あぢさゝる

なにほどの世をさかしまに女郎蜘蛛

魚群めく電車の灯り遠花火

球場へ飛ばす自転車父の夏

## 第三十二回 現代俳句色紙展のお知らせ

\*日 時 十一月十六日(土)～十一月十七日(日)

午前九時三十分集合

\*会 場 とちぎ岩下の新生姜ホール (栃木文化会館)

一階 大会議室 (栃木市旭町)

\*会員コーナー 『色紙・短冊』 一人二点まで

\*特別コーナー 『石倉夏生の俳句世界』

◆はがきで一句コーナー

色紙展に出品しない方のために、発表の機会を設けております。多数のご参加をお待ちしております。  
色紙展に出品する方もふるってご参加ください。

※詳しくは実施要綱を参照。

## ◇第七十回俳句研究会のご案内

\*日 時 九月十八日(水) 十二時より

\*会 場 きららの杜とちぎ蔵の街楽習館

(栃木市市民交流センター)

・詳細は会報六月一日号(前号)をご覧ください。皆様のご参加をお待ちしています。

## ◇お知らせ

\*第三回役員会開催のお知らせ

・十二月十日(火)

・すぎのや本陣 栃木店

(栃木市城内町)

・詳細は後日ハガキにて

\*第二回役員会は、

七月十八日(木)、きららの杜とちぎ

蔵の街楽習館(栃木市市民交流セン

ター)にて開催されました。

※次号176号の原稿締切りは  
11月20日です。